



令和8年3月
第150号
東京都公立学校
情緒障害
教育研究会

題名 小中高等学校の連携による

「切れ目のない指導」の実現に向けて

東京都公立学校情緒障害教育研究会会長

江東区立第五砂町小学校長 小林 英忠



都情研ホームページでもお読みいただけます。
(ホームページは、その他に、研修案内や「みちびき」のバックナンバーなど情報満載です。)



発達障害のある児童生徒への切れ目のない指導は、学校だけの努力では限界があります。医療、福祉等との連携を強化し、地域全体で子どもたちを支える体制の構築が不可欠です。

児童生徒が、自立した人生を送る基盤を築くため、小・中・高等学校が緊密に連携し、社会全体で子どもたちを温かく見守り、支えていくことが、未来を創る教育の使命と言えるでしょう。

結びに、今年度の研修に関わっていただいた、すべての講師の先生方に厚く御礼申し上げます。令和八年度もより一層研鑽を深めていけるよう、引き続きご指導の程よろしくお願いたします。

○令和八年度「定期総会」案内

【日時】令和八年四月二十一日(火) 十四時開始 予定

【場所】大田区民ホール・アプリコ 大ホール

【記念講演】
「特別支援教室の一〇年を振り返って」今後の展望と都情研の役割」

〔講師〕

創価大学教職大学院教授

渡辺 秀貴 先生

※都情研HPから申し込みの上、ご参加ください。(申し込み開始は三月下旬の予定です。)

① 連携体制の構築と情報共有

まず、小・中・高等学校間での連携体制を強化することが第一歩です。児童・生徒の乳幼児期から学校卒業後までを見通して作成さ

発達障害のある児童生徒が、学校生活を通じて成長し、社会へと円滑に移行するためには、小・中・高等学校が連携し、「切れ目のない指導」を実践することが不可欠です。この支援は、次の学校への引き継ぎだけでなく、個々のライフステージ全体を見据えた長期的な視点をもつことが重要となります。「切れ目のない指導」により、児童・生徒は安心して次のステップに進むことができ、自己肯定感を育みながら、将来の自立に向けた力を着実に身に付けていくことができるでしょう。その実現のため、次の三つの柱に基づいた取組が求められると考えます。

② 一貫した支援体制の整備

これからは、各学校が発達障害のある児童生徒に対する共通理解を深め、一貫した支援を提供できる体制を整備することが強く求められてきます。そのためにも、全教員が発達障

れる「個別の教育支援計画」は、切れ目のない支援の根幹となるものです。進学時には、この計画を進学先の学校へ確実に引き継ぎ、生徒が新たな環境でも円滑に支援を受けられることが重要です。この際、保護者の同意を得ることはもちろん、生徒本人の意思も尊重しながら計画を共有することが不可欠と考えます。

さらに、地域の小・中・高等学校の教員が定期的に情報交換を行う機会を設けることも視野に入れる必要があります。特別支援学校のセンター機能を活用し、連携を深めることができると考えます。

③ 主体的な学びを促す支援

児童生徒が、社会の中で自立して生きていくための力を育むために、児童生徒自身が自分の特性を理解し、主体的に支援を求める力を育むことが重要です。そこで必要なのは、児童生徒が、自分の得手不得手を具体的に言語化することだと考えます。

例えば、これまでの成功体験や困難な経験を振り返り、自己理解を深めることを促す等の活動が重要になります。

また、自分の困りごとや必要な配慮を、他者に適切に伝える能力を育む指導も大切です。これにより、児童生徒は新しい環境でも自ら必要な支援を求めることができます。そのようなことを考えます。

令和7年度 東京都公立学校情緒障害教育研究会 活動報告

研修会名	ブロック等	期日	時間	場所	内容・テーマ・演題	講師、実践発表者等	参加者数
定期総会・記念講演会	本部	4月15日(火)	14:00	練馬文化センター 大ホール	ASD等の児童・生徒の就労を見据えた指導について考える	早稲田大学 教育・総合科学学術院 教育心理学専修教授 梅永 雄二 先生	941
第1回ブロック研修会 (入門研修)	東	5月20日(火)	14:30	江東区立南砂小学校	都情研入門研修①(動画視聴、講話等)	立川市立第八小学校 指導教諭 上山 雅久 先生 江戸川区立大杉東小学校 指導教諭 多田 勝 先生	112
	北	5月20日(火)	14:30	北区立西浮間小学校	都情研入門研修①(動画視聴等)	立川市立第八小学校 指導教諭 上山 雅久 先生	105
	南	5月20日(火)	14:30	大田区立東蒲小学校	都情研入門研修①(動画視聴等)		111
	多摩南	5月20日(火)	14:30	府中市立府中第八小学校	都情研入門研修①(動画視聴等)		104
	多摩北	5月20日(火)	14:30	昭島市立拝島第三小学校	都情研入門研修①(動画視聴等)		95
	第1回ブロック研修会 参加者合計						
第2回ブロック研修会 (入門研修②)	東	6月17日(火)	14:30	葛飾区立宝木塚小学校	都情研入門研修② (指導法の基礎的内容)	大田区立立新井第二小学校 主幹教諭 八幡 亮 先生	111
	北	6月17日(火)	14:30	中野区立桃園第二小学校	都情研入門研修②	江戸川区立大杉東小学校 指導教諭 多田 勝 先生	102
	南	6月17日(火)	14:30	中央区佃島小学校	都情研入門研修② 特別支援教室の授業づくりの基本 (小集団指導編)	江東区立臨海小学校 指導教諭 田澤 恵理 先生	133
	多摩南	6月17日(火)	14:30	調布市立調和小学校	都情研入門研修② 実際の指導について	立川市立第八小学校 指導教諭 上山 雅久 先生	113
	多摩北	6月17日(火)	14:30	国立市立国立第七小学校	都情研入門研修② 教室運営・学級担任との連携について	町田市立小山田南小学校 指導教諭 金子 彩花 先生	111
	第2回ブロック研修会 参加者合計						
第3回ブロック研修会 (教室・学級運営)	東	7月15日(火)	14:30	墨田区立外手小学校	特別支援教室及び自閉症・情緒障害特別支援学級の運営について	ブロック担当校長	115
	北	7月15日(火)	14:30	練馬区立開進第一小学校	特別支援教室及び自閉症・情緒障害特別支援学級の運営について	ブロック担当校長	129
	南	7月15日(火)	14:30	新宿区立戸塚第二小学校	特別支援教室及び自閉症・情緒障害特別支援学級の運営について	【実践発表】 新宿区立富久小学校 主任教諭 市川 加奈 先生 新宿区立市谷小学校 主任教諭 佐々木 麻美 先生	170
	多摩南	7月15日(火)	14:30	稲城市立向陽台小学校	特別支援教室及び自閉症・情緒障害特別支援学級の運営について	ブロック担当校長	63
	多摩北	7月15日(火)	14:30	昭島市立つじが丘小学校	特別支援教室及び自閉症・情緒障害特別支援学級の運営について	【実践発表】 昭島市立東小学校 主任教諭 佐藤 舞 先生 あきる野市立増戸中学校 主任教諭 畠田 園子 先生 青梅市立友田小学校 主任教諭 平原美弥子 先生	97
	第3回ブロック研修会 参加者合計						
会報「みちびき」 148号発行	本部	7月				公立幼・小・中学校等全校配布	計2300部
第10回夏季研究大会 (多摩北大会)	本部	8月1日(金)	9:30	小平市民文化会館 ルネこだいら 大ホール	ASD等の児童・生徒の自己理解と 援助要請力	【大会記念講演】 神戸大学名誉教授 鳥居 深雪 先生 【実践発表指導講評】 前新宿区特別支援教育相談員 長谷川 安佐子 先生 【実践発表】 江戸川区立清新ふたば小学校 教諭 鈴木 雄介 先生 練馬区立石神井東小学校 主任教諭 磯松 俊輔 先生 新宿区立落合第三小学校 教諭 片山 昌義 先生 武蔵野市立第四小学校 教諭 鹿島 真里 先生	1131
第10回課題研修会	本部	8月23日(土)	13:10	千代田区立神田一橋中学校	中学校特別支援教室及び自閉症・情緒障害学級の実践発表と情報交換	【都立高校 特別支援教育の取組について】 東京都立蒲田高等学校 赤井晶子 先生 白石田健 先生 東京都立新宿山吹高等学校 田中 洋之 先生 東京都立八王子拓真高等学校 副校長 佐藤 謙吾 先生 【都情研調査報告 中学校特別支援教室、自閉症・情緒障害特別支援学級について】 大田区立立新井第二小学校 八幡 亮 先生 千代田区立麹町中学校 山下 和幸 先生 【実践発表・紹介】 板橋区立上板橋第二中学校 須志田 智章 先生 立川市立第二小学校 柳村 優子 先生 目黒区立目黒中央中学校 塩原 正一郎 先生 【講評・まとめ】 江東区立南砂中学校 校長 近藤 啓太 先生	300

第4回ブロック研修会 (専門研修)	東	9月9日(火)	14:30	江戸川区立船堀第二小学校	児童の特性を活かしたSST指導と 在籍学級との連携	前新宿区特別支援教育相談員 長谷川 安佐子 先生	134
	北	9月9日(火)	14:30	板橋区立板橋第二小学校	集団指導と個別指導に活かせる 指導プログラムの実践	神奈川県立保健福祉大学リハビリテーション学科学科長・教授 笹田 哲 先生	152
	南	9月9日(火)	14:30	港区立御田小学校(仮校舎)	青年期の発達障害 ～自立と自己理解～	恵泉女子大学教職課程 非常勤講師 長岡 恵理 先生	153
	多摩南	9月9日(火)	14:30	府中市立府中第九小学校	DCD(発達性協調運動障害)の理解と指 導・支援	東京家政大学健康科学部リハビリテーション学科学科 講師 東恩納 拓也 先生	144
	多摩北	9月9日(火)	14:30	国立市立国立第七小学校	WISC検査の結果を見立てると指導に どう活かすか	Space Zero PDD 心理・教育研究所 所長 水野 薫 先生	160
	第4回ブロック研修会 参加者合計						
第5回ブロック研修会 (専門研修)	東	10月7日(火)	14:30	墨田区立両国小学校	発達検査の結果をどのように捉え、 どう指導に生かしていくか	臨床心理士/公認心理士 大西 知佐子 先生	151
	北	10月7日(火)	14:30	杉並区立杉並第七小学校	援助を求める力の育成について	星槎大学大学院教育実践研究科専門職学位課程 教授 阿部 利彦 先生	165
	南	10月7日(火)	14:30	北沢タウンホール	発達障害(神経発達症)の理解と 特別支援教室等における指導	Space Zero PDD 心理・教育研究所 所長 水野 薫 先生	133
	多摩南	10月7日(火)	14:30	三鷹市立第六中学校	支援が必要な子の小中高の連携について 考える	中野特別支援学校 主幹教諭 堀切 美和 先生	80
	多摩北	10月7日(火)	14:30	昭島市立つつじが丘小学校	特別支援教室の小集団指導の工夫	【実践発表】 昭島市立つつじが丘小学校 主任教諭 三上 泰弘 先生 【指導講評】 前新宿区特別支援教育相談員 長谷川 安佐子 先生	88
	第5回ブロック研修会 参加者合計						
第10回秋季セミナー	本部	11月19日(水)	14:30	国立オリンピック記念 青少年総合センター	都教委&都情研 指導・支援のつながりを考える	都立学校教育部 特別支援教育企画調整担当課長 福島 正幸 先生 中部学校経営支援センター 統括学校経営支援主事 西村 伸子 先生	473
第6回ブロック研修会 (専門研修)	東	12月2日(火)	14:30	足立区立足立小学校	青年期の発達障害について ～小・中学校で必要な指導とは～	恵泉女子大学 教職課程 非常勤講師 長岡 恵理 先生	118
	北	12月2日(火)	14:30	豊島区立朝日小学校	自立を支えるために ～将来を見据えた支援とは～	【実践発表】 板橋区立中台小学校 主幹教諭 赤池 睦子 先生 【指導講評等】 杉並区立済美教育センター 指導教授 徳田 夕子 先生	167
	南	12月2日(火)	14:30	品川区立第二延山小学校	通級担任時代の子ども達と教材	前新宿区特別支援教育相談員 長谷川 安佐子 先生	105
	多摩南	12月2日(火)	14:30	八王子市立鎌水小学校	児童の実態から考えた小集団指導	【実践発表】 八王子市立鎌水小学校 指導教諭 百瀬 香名 先生 【指導講評等】 Space Zero PDD 心理・教育研究所 所長 水野 薫 先生	84
	多摩北	12月2日(火)	14:30	小平市立小平第六小学校	集団指導と個別指導に活かせる 指導プログラムの実践	神奈川県立保健福祉大学リハビリテーション学科学科長・教授 笹田 哲 先生	116
	第6回ブロック研修会 参加者合計						
会報「みちびき」 149号発行	本部	12月				公立幼・小・中学校等全校配布 計2300部	
東京都教職員研修セン ター教育課題研究発表	本部	1月				東京都教職員研修センターポスター発表	
第6回ブロック研修会 (区市町村ごと)	ブロック	2月3日(火)	14:30		区市町村ごとに、地域に応じたそれぞれのテーマ(推計数)		300
会報「みちびき」 150号発行	本部	3月				公立幼・小・中学校等全校配布 計2300部	
令和7年度 「活動報告資料」発行	本部	3月			発行		
都情研修会 参加者数合計							6766

令和8年度 東京都公立学校情緒障害教育研究会 活動計画

月	日	曜	研修会名、事業名	
4	14	火	企画運営本部委員研修会①	
	21	火	第1回 企画運営本部会・役員会	
		火	令和8年度 定期総会・記念講演会	
		火	地区ブロック本部会（5地区合同）	
-	-	-	●都情研実態調査（全地区、基準日5月1日）	
5	12	火	企画運営本部委員研修会②	
	19	火	第1回 地区ブロック研修会（都情研入門）	
6	2	火	企画運営本部委員研修会③	
	16	火	第2回 地区ブロック研修会（都情研入門）	
	30	火	企画運営本部委員研修会④	
7	14	火	第3回 地区ブロック研修会（教室・学級運営）	
	30	木	企画運営本部委員研修会・研究大会準備作業	
	31	金	第11回 夏季研究大会（東ブロック大会）	
		金	第2回 企画運営本部会・役員会（昼）	
	-	-	-	★東京都教育委員会との連絡会
	-	-	-	◆会報「みちびき151号」発行
8	21	金	課題研修会（中学校／自閉症・情緒障害学級）	
	-	-	-	★三連協（都難言、都弱視）
9	8	火	第4回 地区ブロック研修会（専門研修①）	
	15	火	企画運営本部委員研修会⑤	
10	6	火	第5回 地区ブロック研修会（専門研修②）	
	20	火	企画運営本部委員研修会⑥	
11	10	火	企画運営本部委員研修会・秋季セミナー準備作業	
	17	火	第11回 秋季セミナー	
12	1	火	第6回 地区ブロック研修会（専門研修③）	
	15	火	企画運営本部委員研修会⑦	
	未定	-	-	◆会報「みちびき152」発行
1	12	火	地区ブロック本部会（5地区合同） ・企画運営本部委員研修会⑧	
2	2	火	第7回 地区ブロック研修会（各区市町村）	
	16	火	企画運営本部委員研修会	
	下旬	-	-	◆都情研「令和8年度活動報告資料」発行
3	2	火	第3回 企画運営本部会・役員会	
	未定	-	-	◆会報「みちびき153号」発行

◆今年度を振り返って

都情研の組織・運営が現在の形に変わったのが、二〇一六年二月の臨時総会なので、今年度は「あれから十年」の節目の年でした。情緒障害等通級指導学級が廃止となり、小学校で特別支援教室が導入されたのはその翌年ですから、来年度は多くの特別支援教室が開設十年目を迎えます。この十年で様々なデータが積み上がってきたところで、今流行りの生成AIに、制度変更による成果と課題を聞いてみました。成果は、「在籍校内での支援定着」「担任との即時連携」「早期支援の拡大」「校内支援体制の可視化」「保護者の心理的ハードル低下」と並びました。一方、課題には、「指導者の専門性低下」「指導者養成の仕組み不在」「専門性の希薄化・一般化」「評価の不統一・質保証の困難」「専門の蓄積が組織に残らない」と厳しい指摘が並びました。もしかしたら、「ハルシネーション」かもしれません。でも本当なら、都情研の役割は、益々大きくなってきているということになるでしょう。

今年度も多くの著名な講師の先生や教育委員会の方々のお力を借りて、延べ七千名近くの教員が貴重な学びの場を得ることができました。運営担当の先生、支えてくださった校長先生、そして皆様のご協力に感謝申し上げます。

企画運営本部総務 上山雅久

基調講演 「都立高等学校における通級による指導について」

東京都教育庁指導部特別支援教育指導課統括指導主事 山本 修司先生

パネルディスカッション「通級指導のつながりを考える」

小学校・中学校・都立高校で今、何を指導すべきか

ファシリテーター…創価大学教職大学院教授

渡辺 秀貴先生

パネラー…都立上野高等学校主幹教諭

小美野 真人先生

都立葛飾特別支援学校教諭

力武 萌先生

都立中野特別支援学校主幹教諭

堀切 美和先生

立川市立第八小学校指導教諭

上山 雅久先生

千代田区立神田一橋中学校主幹教諭

齋藤 典子先生

指導講師…東京都教育庁指導部特別支援教育指導課統括指導主事

山本 修司先生

ご講演内容とパネルディスカッションを広報部で書き起こし、まとめさせていただきます。紙面に限りがあるため、お話のかなりの部分を割愛せざるを得ませんでした。それでも、最後までお読みいただき、今後の指導に生かしていただければと願っています。(広報担当)

一 基調講演「都立高等学校における通級による指導について」

都立高校における発達障害教育の取り組みについて情報提供をさせていただきます。

チングにより、発達障害のある生徒を指導する仕組みを独自に整備し、令和三年度から都立高校、都立中高教育学校後期課程において通級による指導を開始しました。

都立版エリアネットワーク

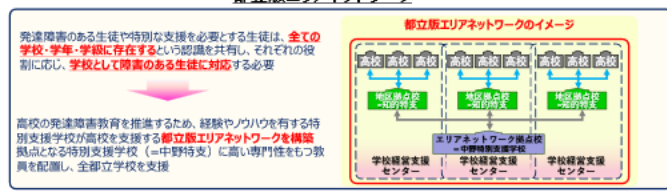


Table with 2 columns: Role (役割) and Content (事業内容). It details the roles of schools, special support schools, and the support center, along with specific activities like information exchange and training.

都立版エリアネットワークについて説明します。都教育委員会では、令和四年度から一定のエリアごとにノウハウや指導の経験を有する都立特別支援学校と都立高校を結び、都立版エリアネットワークを構築し、取り組みを推進していきます。都立版エリアネットワークでは、全体の拠点となるエリアネットワーク拠点校である都立中野特別支援学校と、地区ごとの拠点となる地区拠点校、つまり知的

障害教育部門の高等部を設置する特別支援学校が協力しながら各都立高校の発達障害等の児童生徒を対象とした特別支援教育の支援を行います。エリアネットワーク拠点校には、発達障害教育に関するノウハウや専門性を有する教員をセンター的機能スパーバイザー(CSV)として配置し、地区拠点校が行う支援を様々な観点から総合的に支援します。手続きの流れについては、通級による指導を実施する前、生徒・保護者へ学校での指導の必要性についての合意形成を図り、心理士による発達検査を実施します。その検査結果を踏まえて、改めて校内委員会等で通級による指導を実施するかどうかの検討を行います。生徒・保護者に、指導を受けることについて改めて意思を確認した上で、学校が申請に必要な書類を作成し、所管の学校経営支援センターを通じて都教育委員会に申請します。その後、都教育委員会の判定委員会の審議を経て、通級による指導により困難が改善されるかどうかの視点により、総合的に判定を行っています。判定委員会は年に三回実施されます。以上が、通級による指導までの大きな流れになります。

程に加えるか、もしくははその一部に変えることができます。通級による指導を教育課程に加える場合は、放課後の授業のない時間帯に実施します。この場合、他の生徒と比べて、対象生徒の授業時数が増加することになるため、対象生徒の負担や心理的な抵抗感に配慮する必要があります。一方、通級による指導を教育課程の一部に入れる場合は、選択教科、選択科目の中の一部に替えて、履修することになります。

実際の通級による指導ですが、都立高校の通級による指導も自立活動の内容を参考にして指導を行います。教育委員会と連携している五社の民間事業者の高校通級支援員と学校の教員が一緒にティームティーチングにより、実施します。この五社の連携事業者以外にも高校が独自で選んだ方と連携することもできます。また高校の教員のみで実施している学校もあります。都教育委員会は、都立高校が円滑かつ適切に通級による指導を実施できるよう事前の審査を得た事業者と連携協定を締結し、その事業者を通じて、ノウハウや指導経験等の専門性をもった外部人材を紹介できる制度を構築しています。

二 パネルディスカッション「通級指導のつながりを考える」小学校・中学校・都立高校で今、何を指導すべきか」

(一) 高校通級の現状と課題

(渡辺) 都立高校の今の通級の現状、また課題等についてお話をしたいのでよろしいでしょうか。(堀切) 通級の自立活動は小中学校の先生方が行っている指導と同じです。高校段階では、対人関係の他に心理的な安定、環境の把握、こちらの二点に重きを置く学校がわりと多くみられます。就職の生徒も大学進学する生徒も共通しています。

心理的な安定に関しては、テスト前の不安・不調、就職面接の前後の不安、ストレスの対処法など、生徒から困っているという声が上がることがあります。

また環境の把握に関しては、プランニングやスケジュールリングがかなり大切になり、自分でどのようにに管理・工夫したらよいか考えていくことが必要になります。例えば、遅刻を防ぐためにどのような時間の使い方をすれば良いか、どのような交通経路を使用したら良いかなど、より具体的に考え、取り組んでいます。

(小美野) 自立活動を教育課程の外に設定せざるを得ない生徒もいる現状があります。本校では自立活動という科目として、年間三五時間の授業計画を提出しており

ます。本校は、七時間の四十五分授業を実施しておりますが、水曜日だけ六時間目までで、七時間目が放課後に当たります。例えば本校の場合は、三年生になりますと月火木金の六時間目、七時間目が自由選択科目になります。そこに空きがある場合は自立活動を組み込むことも可能だと思います。しかし、国立型の受験を選んでいる場合だと、その中に組み込まないので、結果的に水曜の七時間目、つまり放課後の時間に設定しています。

指導上大切にしていることは、自己肯定感の高まりであるとか、自分で決めるといことですか。また、学校または社会の一員であるということ、学校に対して寄与できることとか、社会に出たらどうするかということを指導しています。

(二) 重点課題や指導内容

(渡辺) 小中学校の都情研の齋藤先生や上山先生が、会場の皆さんが聞きたいことを代弁する形で質問をしていただきたいと思います。(齋藤) 私の方からは、高校生の発達段階に応じた重点課題や指導内容について伺いたいと思います。

中学校段階でも、予定や行事の事前確認、定期考査前の学習計画、提出物管理など、生活習慣や学習習慣の基盤づくりに取り組んでいます。しかし、高校生になると発

達段階が進み、自己管理能力や主体的な学びがより一層求められるようになります。こうした指導をどのように発展・深化させていくべきか、また高校段階での重点課題や指導内容について、お考えを伺えればと思います。

(堀切) 中高の繋がりについては、地域で育ってきた生徒が自分で進路を選んで進学するので、中学校まではかなり難しい問題行動や困難さが目立つ場合でも、自分に合った高校を選ぶことで、支援が必要ではなくなったというケースもみられます。ですから、中学校から高校段階に進むところでは進路指導がとても大きいと感じています。勉強は苦手だけれど「ものづくり」だったらうまくいくと思って進学した。けれど、注意力や衝動性の課題で機械の扱いに危険が伴い、学校がどのように生徒に配慮をしていけばいいかという相談が都立版エリアネットワークに寄せられることもあります。実際に高校を見学して検討することが大切で、その子の今の状態は、もともとの個体要因と環境要因が合わさった状態なので、自分に合った環境を選ぶかどうかで支援が引き続き必要か、支援がなくても自分で対策をして過ごせるかという違いが生じることがあります。

先ほど、心理的な安定について話をしましたが、チャレンジャースクールやエンカレッジスクールはス

トレスコーピングをカリキュラムに入れている場合もあります。ストレスコーピングを学べるというメリットがあります。

(三) 小中高の「つながり」

(渡辺) 高校の先生から小中学校の先生に聞いてみたいということをお願いします。

(力武) 小中学校の通級でどのような授業を行っているのかを教えてくださいただればと思います。

(齋藤) 私は、中学生の発達段階において「自己理解」が非常に重要な課題であると考えています。ここでいう自己理解とは、「自分自身を深く知ること」です。得意なことを伸ばして活かすことはもちろん、不得手なことも受け入れ、その対処方法を知り、自分の力としていくことが大切です。さらに、自分に合った学習環境やペース、学習方法を理解することは、将来の進路選択にも大きく関わってきます。高校では、多様な学びの中から自分に合った進路を選択することが可能になります。そのためにも、中学校段階での「自己理解」は欠かせない視点です。本校では、中学校の三年間を通して、生徒が自分自身とじっくり向き合い、理解を深めていけるよう、通級の授業で自己理解を重点的に取り組んでいます。

(上山) 小学校は言葉を通して伝えるというのがまだ難しいです。

そうすると、どんな体験を積み上げていくかということを考えて、その中で工夫としては、色々なゲームやロールプレイ等を使って、実際に体験させながらそこで湧き起こる感情について、始末のつけ方や折り合いのつけ方、切り替えの仕方を体験します。中には失敗して大騒ぎになってしまう場合もあるけれども、それ自体も後から振り返って自己理解に繋がることがあります。小学校六年間は長いですけれども、長く指導を続けていると、あの頃はねと振り返る瞬間がやってくるのはやはり高学年の時です。低学年でやっていた失敗みたいなものは強烈に記憶に残っていて、そういう風にはなりたくないとか、中学校に行ったらみんなから嫌われないようにしていきたいとか、目標を語って卒業して行く子もいます。

(渡辺) 小中学校と高校はつながっています。もつと核になる中心の軸について、上山先生から高校の先生方にお話していただくといいかなと思います。

(上山) 都情研の総会の時に早稲田大学教授の梅永雄二先生にお越しいただいてご講演いただきました。小中学校の立場よりもうちょっと先の高校、それから就労のあたりから遡って考えて、小学校で何をやるべきか、就労段階でどんなことが課題になってくるのかというようなテーマです。そのお話

に出てきた就労にあたって身に付けておきたいスキル「ソフトスキル」が、今回のテーマの「つながり」という意味で小中高が一緒にやっていくところかなと思います。職業教育にはハードスキルとソフトスキルがあります。ハード

スキルは仕事そのものに必要なスキルです。ソフトスキルは、職場の人と挨拶するとか、簡単に仕事を休まない、遅刻しないで出勤するとか、相談したり援助要請したりする人間関係を築いていくとか、計画的にお金を使えるといったソフトスキルが大事だということが企業の方からよく聞かれるそうです。ライフスキル、生活、日常生活の中のスキルがとても大事で、これを十五歳までに養ってほしいという話がありました。小学校では、特別支援教育の内容として、セルフケアとか時間管理、金銭管理、移動のスキル、コミュニケーションスキル、余暇のスキルのようなものの基礎を積み上げていて、中学校にバトンを渡したいと思われました。中学校になると机の上での指導もだんだんできるようになってくるから、スケジュール管理や移動のスキル等を実際やらせてみることでできると思います。そして、高校になると実際に電車を使って通学することもありますが、こうしたことがだんだんと職業や仕事の遂行能力につながっていくイメージをもっています。そ

のようなイメージで「つながり」を考えていければと考えています。また、小中高の指導のつながりのために、都情研の研修会を通じた指導者間のつながりも作っていただけらと思っています。

(堀切) ライフスキルは、特別支援学校の高等部でも職業準備性ピラミッドという視点で日頃から重点的に指導しています。特にソフトスキルは、社会に出る上で必要となる力です。高校の通級でも同じようにライフスキルに該当する部分の指導をしています。自分で生活リズムを整えたり、援助要請したりすること等です。私自身は、援助要請と自己決定は小学校からの積み重ねがかなり重要だと思っています。中学校までの積み重ねがある生徒は、高校に入ってから援助要請が出やすく、教師側が支援を提案した際も、拒否をせず支援を受けて力をつけていくことができていくように思います。

(渡辺) ライフスキルという考え方が小中高を貫く形で、最前線にいる先生方がそれに意識を向けながら、日頃の指導をよりよくしていくということをしていただくと、つながっていくというイメージです。すね。

(四) 情報の共有や引き継ぎ

(齋藤) 生徒情報の共有や引き継ぎについて、お伺いしたいと思います。まず、校内で支援が必要な

生徒の情報共有についてです。高校では、先生方の勤務形態が多様化していると聞いています。そのような状況の中で、どのように会議の設定や資料の回覧、日常的情報共有を行っているのか、具体的な工夫や取り組みを教えてください。

次に、中学校から高校への情報引き継ぎについてです。本校では、卒業時に「学校生活支援シート」や「個別の教育支援計画」の写しを、生徒指導要録の抄本とともに、進学先の高校へ送付しています。

実際に高校では、これらの資料や情報がどの程度活用されているのか、また、中学校からの引き継ぎがうまく機能した事例や、逆に課題となった点があれば、ぜひお聞かせいただきたいと思っています。

(堀切) 情報の共有については個々によって様々です。保護者や本人がどうしても中学校までの情報を伝えたくないというケースもあります。引継ぎ書類が高校に届いたので、注意して見守っていたが意外に困難さがみられなかったということがあります。逆に、何も引継ぎ情報がないケースで、入学後に困難さが表出し、そこからようやく中学校までの情報を得られ、もっと早く分かっていたれば手立てを考えられたのという場合もあります。中には、高校側が入学する生徒の情報を入学前に保護者等に聞き取り、支援につなげている

学校もあります。

(力武) 私は特別支援学校なので、中学校からの引き継ぎの連絡を受けたり、事前に六月ぐらいから、本校に入学予定の生徒の学校にコーディネーターと三名で訪問して情報を記録したり、授業の様子を見学したりしています。入学が決まった後も、三月ぐらいに必要な場合は支援会議を行います。入学後、四月五月で様子を見て、担任の先生から中学校の担任の先生に連絡を入れて、電話でのやりとりですが、情報の共有を行っています。

(小美野) 校内の情報共有の話ですが、本校の場合はカウンセリング委員会というのが月一回あります。校内サーバーのファイルに情報を入れて、月一回、情報交換しています。

また、通級の生徒の変容など状況報告は成績会議で行っています。報告する機会は設けられています。

(渡辺) 今、私も大学で教員を目指す学生と接していますが、ライフスキルもそうですし、自己理解、自己認識を丁寧にしながら積み上げていって、自分が向いている職業選択、あるいはもっと大きい言い方をすると「生き方」ってどうなんだろうということに結びついていくような流れが必要かなと思っています。

今回、都立高校の通級指導の現状や課題について会場の皆さんに

共有しました。そして、今後に向けてつながりは大事だなということの再認識をし、それを「つながろう」という行動目標に変えて、実際に何ができるかを探り、すぐにも行動して、できるところから始めていくことが大事だということを確認できた会になったと思います。

三 指導講評

パネルディスカッションの中で、小中学校で大切にしていることで、「自己理解」や「自己決定力」を高めていくことの必要性が挙げられていました。小中学校と高校とは、子どもたちの実態も違い、そこでどう変わっていくのかというところが、重要なポイントになります。通級による指導を通して子どもたちが自分で将来のことを考えて決めていく力を育むことがすごく大事だと思います。

今回「つながり」ということがテーマでしたが、中学校まで通級指導を受けてきて、高校になってそれをやめてしまう子もいるかもしれないし、そのまま継続して通級を受ける子もいます。その子が考えて決めたことであり、いざれにしてもそれまでに積み上げたことが高校に行っても継続して生かされていると思います。小中学校において、日頃から地道に指導していることが、高校に行っても社会人になっても、生かされている

るものだと思います。ただ、そこでやはり大事なことは、いかにそれまでの積み上げを高校や社会に出るときにつなげていくかということだと思います。

情報の共有や引き継ぎについては、情報が来ない、要請もない、申請もないと相手校の動きを待つのではなく、子どもたちが困っている様子を見たら、お互いに自分たちが積極的に動き、問い合わせをしてみるのが大事です。なかなか学校同士の情報共有が円滑にいかないのであれば、特別支援学校も交えて引き継ぎをするという「つながり」は、将来の子どもたちの力にも還元されていくことだと思います。ぜひそのことを意識して動いてほしいです。

編集後記

広報に関するご意見、ご感想がありましたら左記までお寄せください。

編集・発行 企画運営本部広報担当

各ブロック 広報係

世田谷区立玉川小学校

(廣田智仁)

☎ 03・3703・1615